

## 極域研究連絡会発足にあたって

気象学の中の一分野の活動の一つとして、5年前に南極ないしは極域に関心を持つ会員らが、南極の気象の研究の普及を目指して気象学会の中に月例会「南極圏の気象」を発足させました。この会の目的は、南極圏の気象についての話題あるいは現在問題となっている事柄の発表および討論、新しい研究課題についての検討を行うことでありました。月例会は、この5年間の春季、秋季の大会時に、計8回開催され、のべ人数にして350名以上の参加者を得ました。発表者としては、南極圏の気象が地域科学の性格をもつ為、気象学会以外の学会で活動している方々にも何名か話題提供をしていただき、月例会活動を通して、過去、現在の南極と極域に関する気象研究、将来どのような計画が考えられるか等の話題が学会員に少なからず浸透して来たと思われまます。

しかしながら、学会の活動は、常に広く学会員に目を向けるとともに、学会外の組織との関係を保つことにより、学問の進歩を推進するために必要な活動を積極的に行う事が重要であります。月例会が回を重ねる中で、この点に関連して問題、不都合が生じはじめてきました。

第1は南極研究における学会の指導的役割に関係する問題であります。これまでの月例会において、将来の南極圏の気象の研究計画等に関する多くの重要な話題や提案が出されたにもかかわらず、それを実施に移す場に伝える有効な手段がありませんでした。このためには研究発表会以外に作業委員会等の組織を別個に作り討論を重ね、研究計画を作成して行くことが必要であります。

第2は、学会員の研究機会の拡大を推進するための方策に関する問題であります。日本のみならず世界の情勢として南極研究は現地観測が大半を占めています。会員等にも広く現地観測の機会を提供する為に、現地観測参加の為の1つの窓口の役割を果す必要が感じられました。

第3は、他学会との協調に関係する問題であります。現在の地球科学の研究は、大規模化し、学際的な研究が増えつつあります。南極の気象研究は、雪氷学、海洋学、気候学等と密接な関係があり、非公式ながらも研究計画に関する意見等の問い合わせが他学会から来ています。大規模な学際的な研究を進めていくためには、学会か学会

に属する1つの組織が中心になって、このような動きを推進するとともに、具体化する機能を持つ必要があると思われまます。

上に述べた3つの重要な問題以外にも、南極地域に関するデータの流通の不足も感じられます。5年間の月例会活動を通して、以上のように現在の形式では学問の進歩の為の障壁を克服できない点が何点か出て来た為、月例会を委員会に発展的に解消して、会の機能を強化する要望を平成元年1月の理事会に提出した所、日本気象学会極域研究連絡会として再発足が認められました。そこで、極域研究連絡会では以下の目的、活動内容と組織で活動を開始することを考えています。

### 1. 目的

南極を中心とした極域の気象についての

- a) 啓蒙および会員間の議論の促進
- b) 情報の流通の促進
- c) 研究計画の統合及び会員の研究機会の拡大
- d) 他学会との対応

### 2. 活動内容

- a) 研究会の開催
- b) 他学会との共同シンポジウムの開催
- c) 「天気」にニュース・レターを掲載
- d) 長期研究計画等の提案・報告
- e) 南極地域観測隊への隊員候補者の紹介

### 3. 組織

- a) 代表
- b) 幹事 (10~15名程度)
- c) 事務局 (幹事の内、数名が担当)

### 4. 会の財政

学会からの活動費に依存する

これらが活動方針であります。このような組織は学会内でも初めての試みである為、当面は試行錯誤で進めていくことになります。開放的で、柔軟な組織として維持して行くことを世話人の間でも、確認していますので、活動内容等についての意見並びに積極的な参加を期待しています。

世話人 (安成哲三、山内恭、大畑哲夫、遠藤辰雄、伊藤朋之)